

平和と命を繋ぐバトン

一宮市立北方中学校 三年

矢篋原 愛華

やのはら

まなか

「お天道様、今日も一日ありがとうございます。ごさいました。」と言いながら、夕日に向かって手を合わせた。その時間を毎日、大切にすること
が私の曾祖母の習慣だった。

昭和六年に生まれ、九十三歳で天国へと旅立った曾祖母は、今の私と同じ中学生のときに戦争を経験した。認知症を患い、何かを思い出すことが難しくなっていた曾祖母だが、終戦

の日が近づくと、戦争の話を口にするのがあった。一宮市に住んでいた曾祖母は、空襲警報が鳴るたびに防空壕に逃げ込み、焼夷弾による爆撃の恐怖の中で毎日を過ごしたそうだった。私の住む地域にも防空壕がたくさんあったこと、食べ物に困り、芋のつるを食べることもあったこと。戦争の映像をテレビで見たときなど、何かが記憶を引き寄せたかのように、曾祖母は戦時中のことをぽつりと言うことが多かった。私の名前を覚えていたかも分

からない曾祖母が戦争の話を口にする姿、太陽に祈り、感謝を伝えることを忘れない姿。そんな曾祖母の後ろ姿を見るたびに、その小さな背中に、どれほど辛く苦しい過去を背負っているのだろうと思い、胸が強く痛んだ。　　空からポツポツと火の爆弾が落ちた。これは、花火や焚き火を見たときなどに、曾祖母がつぶやいていた言葉だ。この言葉は火を見ると反射的に焼夷弾を思い出してしまふ曾祖母の悲痛な気持ちを、強く表していると感じた。もしも私が今、戦争を経験するようになったら、爆弾の恐怖や生活の苦しさ、大切な人を失う悲しさで生きていくのも精一杯だと思う。そんな戦争を実際に知っている曾祖母には、思春期という多感な時期に負った深い心の傷が、戦争が終わっても残り続いていた。その事実を前に私は、非痛な気持ちとともに、曾祖母の中で戦争はまだ終わっていないこと、曾祖母はまだ戦い続けていることが心に深く刻まれた。

今、日本は本当に平和なのか。

私は、曾祖母のように心に戦争の傷を負った人、辛い想いをする人がいる限り、戦争は人々の心に残り続けると思う。だからこそ、戦争を知る人から聞いた想いを、未来の世代へと大切に語っていくことが必要だと思う。

私が曾祖母と過ごした時間はたったの十年。この十年の間に、今ある平和は決して当たり前のことではなく、たくさんの人の悲しみの上で成り立つ大切なものだ。曾祖母は私に教

えてくれた。戦争を乗り越えてくれた曾祖母の強い力がなければ私はここにいないだろう。もし、もう一度だけ会えるのなら、私は曾祖母にこう伝えるだろう。

「強く、そしてたくましく、私に命を繋いでくれて本当にありがとう。」

曾祖母から受け取った平和のバトンを今度は私が繋いでいく。これこそが今の私にあるべき大切な使命だ。感謝と曾祖母の想いを忘れずに、私はこれからの人生を歩んでいきたい。